



歯車

私はさる町工場の工員として不満なく働いていた。強いて言えば今この目の前の小さな歯車がどうしても滑らかに回転してくれないので先ほどからその調整に苦慮しているのが悩みといえれば悩みと言えただろう。

おかげで私はその時周囲の状況を全く察知しておらず、すると向こうで作業していた木村がいきなりスパナを投げ出して憤然としている。それまでのいきさつがわからぬのだがちょうど私の足下に転がってきたからそのスパナを拾って木村に渡そうとしたところ、余計なことだと木村はそれを一蹴し、あまっさえ差し出した私の右手を邪険に払ったものだから、またもやスパナは油じみたコンクリートの床を滑って今度は後藤田の足下に転がった。

私はなおも憤然としている木村を見て、この場合冷静にスパナを渡したという私の行為のその冷静さという部分が木村の癪に障ったのだと理解したから大人しく退いたのだが、予想外にも今度は後藤田が激怒した。

いったいに後藤田は年輩の定年も近い苦労人で普段にこにこしているばかりで滅多に怒ったりはしないのだ。その彼がここまで怒ったのを見て木村は大いに驚いた様子であった。

後藤田によればせつかく私が親切に拾ってやったスパナをそのように扱うのは人間性の問題として木村の方に非があるとのことであり、その発言は要するに私を木村の怒りの矛先から守ろうとする善意の現れのように思われた。

それに加えて丁度木村と私の間で作業をしている加納女史までがそうよそうよと後藤田の肩をもったような発言をしたので、私はこれらの集中砲火を浴びては返って木村の敵愾心をあおる結果になるのではないかと考えたのだが、案の定木村はスパナどころか腰にぶら下げた装備のいっさいをかなぐり捨てて、おお、どうせ悪いのは俺だと開き直った台詞をはき始めたものだからこれは收拾がつかなくなりそうだと思ったところで幸いにして休憩のブザーが鳴り響き作業が一時中断したのは偶然のもたらした幸いであつたらう。

木村はそれでもまだ腹を立てているようなので、私は思案の上実際はなにがなんだかわからぬままに、君の気持ちはよくわかるからその行動はやむを得なかったことであろうと話しかけた。これは私がこれ以上木村と険悪な状態を続けていれば自分の業務に支障を生じかねないと判断しての極めて功利主義に傾いた発言であったが、木村はおおいに感激した様子で君という人間は尊敬に値するとまで答えてくれたのは計算以上の効果であった。

それからの木村はなにが不満のあるごとに私にそれを吐露するようになり、私はそれに格別有用とも思えぬ返答をしていたのであるが、木村はすっかり私に心酔した様子でそれからは大した愚痴も言わずに仕事にせいを出しているようだった。

同時にそれまでの木村はその短気な性格の故に同僚のやっかい者に等しかった訳なので、実際は偶然の結果ではあつたのだがそれを解決した私は副次的な産物として他の同僚たちからも一目置かれるようになったものだ。しかしそれは私にとっては特別嬉しいことでもなかったもので、すぐに他人の評価は忘れてしまった。

ところで私たちが作業をしているこの業務用の電気炉ほどの大きさの四角くてやたらに色々な補機類が繋がれている物体がそもそもなんであるのかは私たちの誰も知らないことであった。私たちは単なる工員にすぎず、その物体にパイプを配置したりバルブを溶接したり、磨いてみたり、そんなことを延々と続けていただけのはなしで、私自身はそれでちっとも構わなかったのであるが、しかし普通の人間はわけのわからぬ仕事に対しては今一つモチベーションを保ち得ないのであろうか、それからはそもそも我々の仕事はなんなのか、そういう質問が度々私に寄せられるようになったのだが、先に木村が激怒したのもその根本にはそのような問題もあったからではなかったろうか。

もちろん皆と同じく一介の工員である私がそんなことを知る由もなかったのも、それは他の工員も心得ているはずではあるのに、それを前提としてなおかつ私に聞いてくるのはよほど皆のストレスが高まっている証拠と推察された。

いくら皆のストレスが溜まろうが私には関係のないことではあったのだが、それが高じて木村のように仕事を放棄されては私の業務量が増加する可能性はあるわけで、月給制であるこの仕事に関してはそれは単位時間に私のなすべき仕事量が増加することを意味する。すなわち同額の給料を貰って多くの仕事をこなさねばならないことになるのだから、私に無関係なこととも言い切れない。

そこで私はラインの係長に会いに行ったのだが、彼とてその正体を知っているはずはなく、それはやはりわかりきっていることなので彼は私を避けよう避けようと逃げ回ってばかりいた。なるほどこのような態度が俗に言う利口な振る舞いというもので、さすがに係長ともなると違うものだと私は感心したのだが、実は彼には逃げ回る必要などなかったのも、なんとなればようやくのことで彼を掴まえることのできた私は仕事の内容に当たっては適当なことを言うておくので放って置いて欲しい頼んだだけなのだ。

そうして私は係長も口を濁して語らぬからよほどの企業秘密の部品であるらしく、しかしおそらくは何か衛星関係でかつ軍に関係があるのかもしれないから皆もあまり口外しないほうがよいようであるなどと極めていいかげんなことを伝えたものだった。

そんな重要な精密部品をこんなトタン屋根にペンペン草の生えたような一介の町工場で作るものなのだろうかというもっともな疑問を呈した者もいたが、いや、まさにそう思われるからこそ誰も気がつかないわけで都合がいいのかもしれないと言う者もいて、ひとしきりはその話題に花が咲いたのだから私の発言にもなにがしかの効果はあったというべきであらう。ともかく皆前よりか発憤して仕事に身が入っている様子であった。

仕事に対する熱意云々といったことは経営者が従業員に対して考えるべきことであって私には何の関係もないことではあったが、他の者が仕事にせいを出してくれればそれだけ私の負担は減少する理屈だからその意味でこれは喜ばしいことであった。

それからしばらくは職場にはそういった好ましい均衡状態が訪れたのだが、均衡という物は常に危ういバランスの上に成立しているものなのだろうか、そのうちまたもや職場に不穏な空気が満ち始めた。

私の担当部署の現場には紅一点女性工員が存在しており、それは前述した加納女史なのであるが、彼女が何かという私に話しかけてくるようになったのだ。

それは多少作業の邪魔にはなるのだがさほどのことではないので私は常にこれに対して適当な返事をして済ませており、特別な対応の必要はないと高をくくっていたのだが、それと時を同じくして全く部署の違う作業場から上田という男が私の元に訪れるようになった。と同時にあれほど私に心酔していたはずの木村の目つきがまたもや険悪なものとなってきた。

この緊迫した空気は私にもそれと感ぜられるほどのものであり、しかしその原因については私の理解を越えるものであったし、何がそうしたのか知らないが放っておけばまた常態に復するであろうと思っていたのだが、日増しにその緊張は高まる度合いを見せ、そうしてある日私は加納女史から折り入って相談があると持ちかけられたのだ。

加納女史に寄れば実は従前加納女史は木村とつきあっていただけだったが、その粗暴さにほとんど愛想が尽きているということであった。しかし木村は彼女をあきらめきれずにいるらしく、ことあるごとに嫌がらせをしてくる。実のところ先日木村がスパナを投げつけたのも加納女史に対する嫌がらせに違いないのだというのであった。

私はなんだ木村が怒ったのはそういう意味であったのかと拍子抜けするとともに、それは木村と加納女史の問題であって、なぜ女史がそれを私に相談するのか理解に苦しんだし、私はどうすればいいのでしょうかと目に涙まで浮かべて問いかける彼女に対してなんら助言する言葉ももたなかった。しかし加納女史は黙っている私を解放してはくれず、唐突に私にはつきあっている人がいるのかと聞いてきた。

実際に私にはつきあっている異性はいなかったなのでその旨を伝えたのであるが、彼女は私の目をジッと見据えて思わしげな表情をしたものだ。しかし私にその意味が理解できようはずもなく、ただ黙っているより仕方のないことであった。

そうした話を加納女史は作業時間の最中に私に話しかけてくるのであって、私にとってはそれは作業の能率を下げるという意味ではなはだ迷惑になったのみならず、常にその挙動を木村が聞き耳を立てていて、その表情がいつそう険しくなっていくのは困ったものであった。

それに輪をかけて例の上田がやってくる。気がつけば上田は極力加納女史が私と話している最中を狙って訪問しているように観察されたので、私は度重なる上田の訪問に偶然ではないものを感じだしたのだが、案の定上田は加納女史とつきあいたいと思っているのだがどうしたらいいのだろうか私に尋ねてきた。

そんなことを聞かれてもわからないがどうして私に聞くのかと上田に尋ねたところ私が親しく加納女史と話をしている様子だからだとのことであった。

上田に対して加納女史の私に対する態度を説明するべきかどうかしばらく考えてみたが彼女の真意は私にもわかりかねたし、私は加納女史に特別の感情は見いだせないで、この場合彼女と上田が親しくなってもらえれば女史の私に対する訪問も減るであろうからむしろそれは喜ばしいことであろうと思われた。

しかし私のみたところ加納女史は上田が来る度にそれを避けるようにその場を離れているようにしかみえず、けれどもそれも単なる偶然である可能性もあるわけだからそれを上田に言っているものかどうか、そこで私はそのような人間の男女間の機微については疎いものであるから自分で本人に当たってみるしかないだろうと言っておいた。

それでも上田はしつこく私のところに訪問することを止めず、それもやはり必ず加納女史が私のところにいる時を狙ってくる。

そうすると私のところにはしょっちゅう加納女史か上田が滞在することとなり、必然的に私の仕事の手は遅れるからそれだけ不要の労働時間を消費することとなる。

どこでも同じことだろうがこういった職場においては仕事量が増えたからといって賃金が上がることはない代わりこなした仕事量が減れば容赦なく賃金も削られる仕組みになっているのでこれは私にとっては好ましからざる事態だった。

そこで私はもう周囲の人間関係に関わるのは止めにして目の前の歯車の噛み合わせを調整することのみに専念し、もはや加納女史が話しかけようが上田が来ようが放っておくことにした。幸か不幸かこの小さな歯車はどうしても滑らかに回らないので私はただひたすらにその事に集中することができたのである。

そうしたある日、どうやら木村が加納女史に話しかけているようなのであったが、私は既に無我の境地を目指している最中だったのであえてこれを意識の中から閉め出していたのだが、そのうち上田がやってきてこれに加わったようであった。

それでも無視しているとこの三人の会話がいつまでたっても止む様子がなく、そのうちそれは口論と呼ぶべきものに発展してしまったようで、もはや三人の言葉はわめき声に近くなった。

ここまでくるとさしもの私もただ小さな歯車に集中していることも不可能となったので、仕方なく三人して言いあっている輪の中に入り込み、お互いに言いたいこともあるらしいが声が大きすぎて私の仕事の集中を著しく阻害するのであるからここは休み時間か終業時間の後にはしてもらえまいかと大人しく頼んでみた。

すると三人は一瞬黙り込んだ後に、人が腹を立てているときにお前は何を上から目線で言い出すのかとか、傲岸不遜な態度もいかげんにしろとか、よくよく考えてみたらお前が一番気に食わないとか、私に対して一斉に非難の嵐が巻き起こってしまった。

特に木村の激昂は先だって以上のものがあり、目立った工具を私に投げつけてそのいくつかは命中したのだがそのくらいの成果では全然納得できないらしく、やにわに私に掴みかかるといきなり殴られたのには驚いた。私が転倒すると馬乗りになってきたので私は顔面への攻撃を阻止すべく自然とうつ伏せに体勢を変えた。

おかげで顔面は守れたものの今度は後頭部が標的となり、この体勢では木村の拳を腕を持って防ぐのも困難だったのでポカポカと連続して木村の連打を後頭部に受けることとなった。

その間上田と加納女史は何もしなかったけれどもそうかといって木村の行為を止めてくれようとしなかった。またそれ以外の周囲の者は何がどうしたのか事情がわからずしばしあっけに取られていたのでその間私は殴られっぱなしであったのだが、ようやく皆が止めろ止めろと木村を制止してその体を羽交い締めにしてくれたので私は難を逃れた。

それにしても今回の木村の激高は先のものより数段上であったし、その後一端は極端なほどに私に心酔して見えたものだからいかなる理由があったのだろうか、羽交い締めにされながらも憤然として顔を真っ赤に身をよじっている木村を身ながら私が思案していると、いきなり加納女史が泣きじゃくりだした。

これもまたいったいどうしたわけなのか、誰にもわからぬ予想外の出来事であったが、彼女は泣きながら、こんな人だから私は別れたかったのだ、私は本当は貴方が好きになったのだ、と叫ぶと私に抱きついてきたので、またまた私は驚愕した。

すると彼女が足しげく私のところに来るようになったのはやはりそういう感情の発露であった訳なのか、そうしてそれを知らずに上田はせっせと私を訪れていたのであるか。そのような場面を毎日見せられては加納女史に未練の残る木村の怒りももつともであったろう。

私は抱きつく加納女史を引き剥がしながら自分にそのような恋愛感情がないことを言ったのだが、これは時期を失っていたのみならず確かにそのような修羅場と言うべきことではなかったようで、加納女史は一層わあと泣きながら貴方のように冷たい人はいないと一転して私の敵に回ってしまった。なるほど愛情と憎しみは表裏一体とはよく言ったものだと私は感心した。

上田は女史の言葉を聞いてしばらく呆然としていたがやがて陰険な目をして、とにかく騒ぎの起こる度にお前が関与しているのはやはりお前のせいだからなのだろう、と理屈にならぬ理屈で私を責めた。

そこで初めて私は三人のもめ事がやはり加納女史を巡る男女関係の問題であったのだろうと気がついたのであるが、いまさらそんなことがわかってはもはや何の役にも立たないことは明白であった。

いずれにせよこのようにして私は結局一斉に周囲の非難を浴びる立場となってしまったわけで、ここまで騒ぎが大きくなると普段ものも言わない係長も何か言わねば収まらぬと判断したらしく、のこのこと足を運んできたのだが、皆のわめく声を聞いて、とにかくここは私を怒っておくのが得策といかにも彼らしい思考回路で君はいったい何を考えているのだねと私を糾弾した。

するとよせばいいのに後藤田がいやしくも衛星部品を作らせて貰っているという工場がこんな様ではやってはいけないと係長に上申したものだから、係長は、衛星？いったい何の話だとにべもない。

そこでみんなして衛星部品の製造など私の嘘八百だとばれてしまったものだから、ただでさえ皆の集中砲火を浴びている最中に私はとどめの一撃を食らわされたようなものだった。

特に普段真面目な後藤田の憤激は凄まじいものがあり、後藤田によればこうした職場内の人間関係の葛藤の原因は人を人とも思わぬ私の態度にその原因があるとのことであった。確かに騒ぎの原因が私にあることを認めることはやぶさかではなかったが、これは私にとっては思わぬ意見であった。しかし言われてみると確かに私が他人との人間関係を軽視して自分のことのみに関心を持たなかったのは事実である。

このようにして私はその工場を解雇されたわけなのだ。

私は一つの歯車である。そう信じていたし、そうであろうとしてきた。私は一切の人間的な感情を廃し、ただ自分の目の前の仕事のことだけを考え、それによって得た収入によって、趣味もなく、楽しみもなく、ただ生きていければそれでよいと考えていただけなのに、どうやらそれもままならないようなのであった。

私は職場を辞めざるを得なくなったが、食っていくためにはまた同じような職場に勤めることとなるだろう。そうしてそこにはまたなにやら用途のわからぬ物体とその小さな歯車が待っていることだろう。

私はその歯車と格闘しながら、ひたすらに人間関係を否定しようとするが、しかしまた人間の感情の機微というものに直面することになるのだろう。